

ハンセン病の歴史 デジタルブック

栗生楽泉園 歴史館

展示品が語る暮らしと文化

ハンセン病は、長い歴史の中で数えきれないほどの誤解や偏見にさらされ、元患者やそのご家族は深い苦難を背負ってこられました。

栗生楽泉園は、そうした重い歴史と向き合いながら、入所者の皆様の人生と社会の歩みを今日へとつないできた場所です。

園内に受け継がれてきた品々や記録には、当時を生きた人々の思い、社会の姿、そして差別と向き合いながら歩んだ軌跡が、静かに息づいています。

群馬県では、これらの貴重な展示品を確実に未来へ引き継ぐため、デジタルブックを作成しました。

栗生楽泉園では、今も入所者の皆様が穏やかに生活されています。このデジタルブックは、その暮らしに配慮

しつつ、園が歩んできた歴史を丁寧に紹介しています。

群馬県としては、より多くの方にハンセン病の歴史や、そこで生きた人々の記録を知っていただき、理解と共感の輪が広がることを心から願っております。

もし機会がありましたら、ぜひ現地を訪れてみてください。画面だけでは伝えきれない息づく歴史の重みや質感を、より深く感じていただけることでしょう。

最後に、制作にあたり多大なご協力を賜りました栗生楽泉園の皆様には深く感謝申し上げます。皆様の深いご理解とご尽力があつてこそ、ここに受け継がれてきた貴重な歩みを、多くの方へお届けできる形にまとめることができました。この場をお借りして、改めて御礼申し上げます。





ようこそ、栗生楽泉園歴史館へ。

当歴史館は、国立療養所栗生楽泉園においてハンセン病に向き合ってきた人々の歩みを後世に伝えるため、平成20（2008）年11月に社会交流会館として開館し、令和6（2024）年12月に栗生楽泉園歴史館と名称を変更しました。木のぬくもりを感じる館内では、湯之澤集落の歴史のほか、入所者の生活や文化活動を伝える史料を数多く展示しています。草津の自然に囲まれた静かなこの地で、約一世紀にわたり栗生楽泉園が歩んできた歴史の一端に触れ、そこで積み重ねられた暮らしに思いを馳せてみませんか。

なお、このデジタルブックに掲載されている写真は、すべて当歴史館に収蔵されている史料をもとにしています。



常設展示スペース



ハンセン病を^{わずら}患い入所した方々の思いに触れられるDVD視聴スペース（約20分間）

国立療養所栗生楽泉園は 昭和7(1932)年に開所しました。



栗生楽泉園のジオラマ。標高約1,100mの高台に位置し、敷地面積は742,257㎡(東京ドーム約16個分)。西に白根山、南に浅間山を望む。

旧湯之澤地区からの集団移転。

草津温泉は古くからハンセン病に効果があると伝えられ、多くの患者が湯治に訪れ、病健混浴の状態が続いていました。しかし、明治20年頃から患者たちは草津温泉の下流に位置する「湯之澤地区」へ移り住むことを余儀なくされ、始まったのが湯之澤集落でした。その後、

昭和6(1931)年、「癩(らい) 予防法」が制定され、ハンセン病患者の隔離療養が国の方針として定められました。翌昭和7(1932)年には国立療養所栗生楽泉園が建設され、約60年続いた湯之澤集落は吸収される形で、昭和17(1941)年に解散式を行い消滅しました。



商店や旅館などの宿泊施設が軒を連ね、ハンセン病患者の「自由療養地」であった湯之澤集落。

ハンセン病とはどんな病気？

ハンセン病は「らい菌」に感染することで起こる病気。

治療法がなかった時代には、失明や麻痺、

身体の一部が変形するといった後遺症が残ることがありました。

ハンセン病の治療薬の変遷

1930年代以前



“伝統的治療”として長く使われてきた「大風子油(だいふうしゆ)」。身体に激痛を伴い、また効果も薄かった。

1940年代



アメリカで開発された「プロミン」は、1940年代にハンセン病に対して初めて明確な治療効果を示した薬である。

1980年代～現在



昭和57(1982)年から経口薬の多剤併用療法がスタート。副作用が少ないのが特徴で、現在でも世界各国で使用される。

❖ 展示品紹介〈生活・労働関連〉



引湯管 (いんとうかん)

湯畑源泉から園の浴場へ引湯するため、地中に埋められた木管。長さ約180センチのアカマツをくり抜いて使用。約3.5キロにわたってつないだ。作業には入所者も従事した。



自由療養地区の住まい

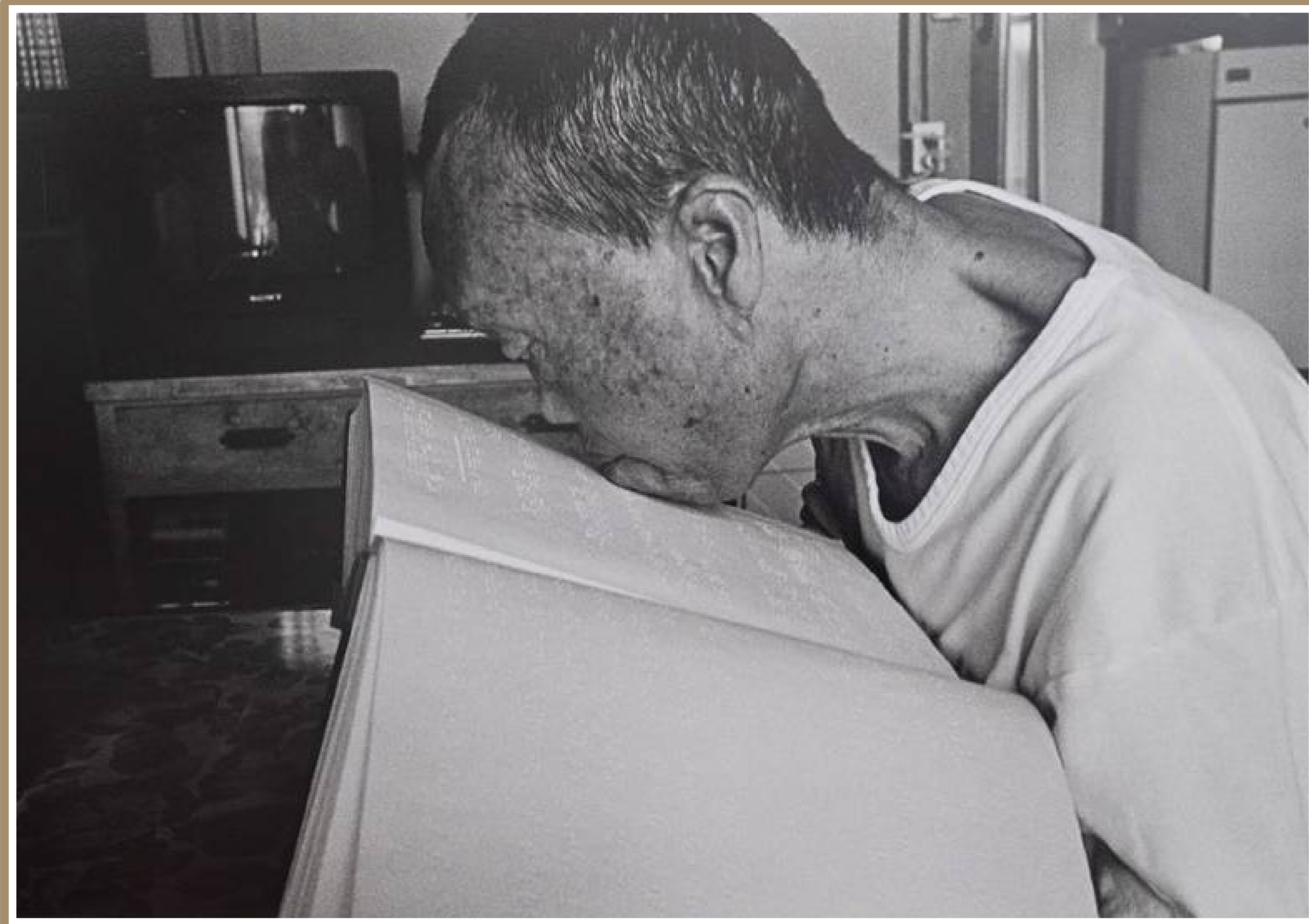
園内の一部区域に建てられた、広さ十坪ほどの一戸建ての住宅（病舎）の生活空間を再現している。



背負子 (しょいこ)

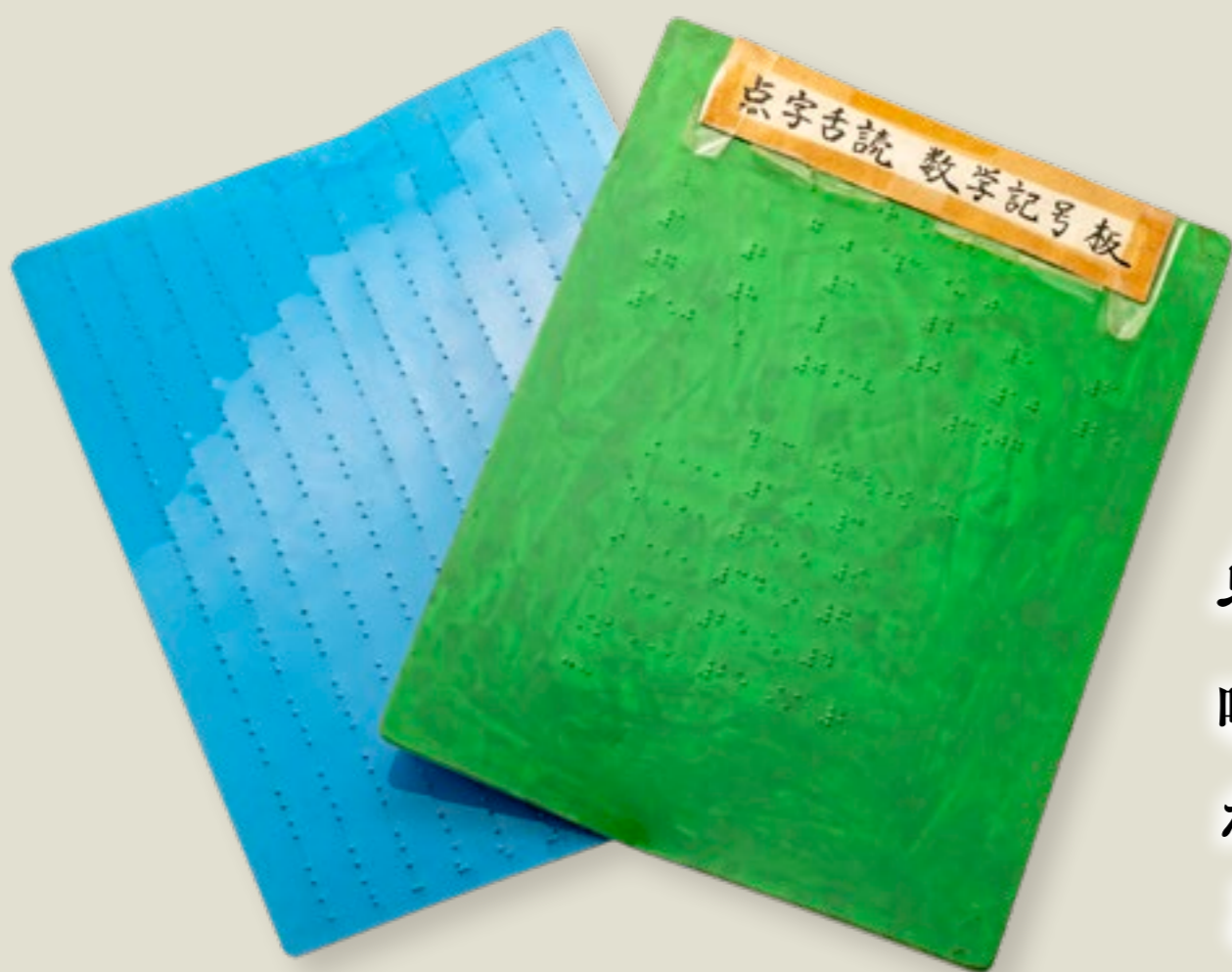
炭俵や薪を運ぶための道具。昭和初期ごろ、入所者自身が旧六合村（現中之条町）から10キロの道のりを歩いて運んだ。

Column | 舌読（ぜつどく）について



自ら読めることが、 生きる希望に

ハンセン病の症状が進み、失明したり、知覚麻痺により指先の感覚を失ったりしてもなお、唇や舌先を使って点字を読む「舌読」を習得し、文字を自ら読みたいという意欲のある入所者も多くいた。写真は、全盲の歌人、金夏日（キム・ハイル）さん。



点字舌読数字記号板
唾液で濡れても紙に穴が空かない素材を使うなどの工夫が施された。



改良点字練習機
点字の仕組みを初歩から学ぶための道具で、大中小あらゆるうちの大である。



園券

園内通貨として発行されたものの、実際にはあまり流通しなかったといわれている。

❖ 展示品紹介〈創作・趣味娯楽〉

入所者が制作した詩・俳句・短歌など文芸作品、
絵画、書道などの美術作品を展示。文化活動が
盛んだった理由のひとつとして、それらの活動を
通じて社会との交流の接点を持つことにつながり、
それが入所者の方々にとって大いなる希望となった
ことが挙げられる。



大場翠雨の書

楽泉園の書道会を牽引し、入所者
や職員に書の手ほどきをした。



固定バンド

不自由な手や指の動きを補うために、
手に装着するもの。

館内に展示される入所者の絵画作品



村越化石の代表作品

平成3(1991)年に紫綬褒章を受章した俳人。
左から句集『筒鳥』(第4回詩歌文学館賞)、
句集『端坐』(第17回蛇笏賞)、句集『山国抄』
(第14回俳人協会賞)。



入所者所有のバイオリン

音楽部は講師による指導を受け、入所者向けの音楽会や来園者への歓迎演奏も行っていた。



入所者の手芸作品

指先のリハビリとして手芸など、細かな手作業に取り組んだ。

その他の部・愛好会・趣味活動

〈運動系〉野球、庭球、ゲートボールなど

〈文化系〉演劇、写真、盆栽、囲碁、将棋など

Interview

歴史館 千川 直康 学芸員

大学の社会学部を卒業後、約20年間栗生楽生園に勤務。その後、社会交流会館運営委員会に携わり、現在の職に就く。学芸員として勤務する傍ら、ハンセン病に関する講演活動にも取り組んでいる。



「ここには、わたしの青春があって、恋もあって、悲しみも喜びも、人生そのものがあつた。」。ある入所者が私に伝えてくれた言葉です。ハンセン病患者となり、栗生楽生園に入所“しなければならなかった”方々には、失明や麻痺など身体的な苦痛、表に見える症状による差別や偏見など、筆舌に尽くしがたい苦しみがあつたことに違いありません。それでも、栗生楽生園で生涯を暮らした

入所者の多くは、社会で健やかにそして自由に暮らすわたしたちと同じように、“生きること”を謳歌したのもまた事実です。制限の多い暮らしの中にあつても、彼らは一人ひとりが並々ならぬ努力を重ね、その過程で生きる希望を見いだしてきました。そうして自らの人生を力強く、そして精一杯輝かせていたと言っても過言ではありません。

歴史館は、社会交流会館を前身とし、様々な変遷を経ながら、園の職員と入所者の皆さんで築き上げた大切な場所です。ぜひ、展示資料から入所者の方々の思いを感じ取っていただけたら、この歴史館の運営に携わるものとして大変うれしく思います。

千川学芸員おすすめ展示 | 舌読についての展示品は必見です。

見学のご案内

栗生楽泉園 歴史館

開館時間：9：30～16：00（最終入館15：30まで）

休館日：月曜日（祝日の場合は翌日）、年末年始

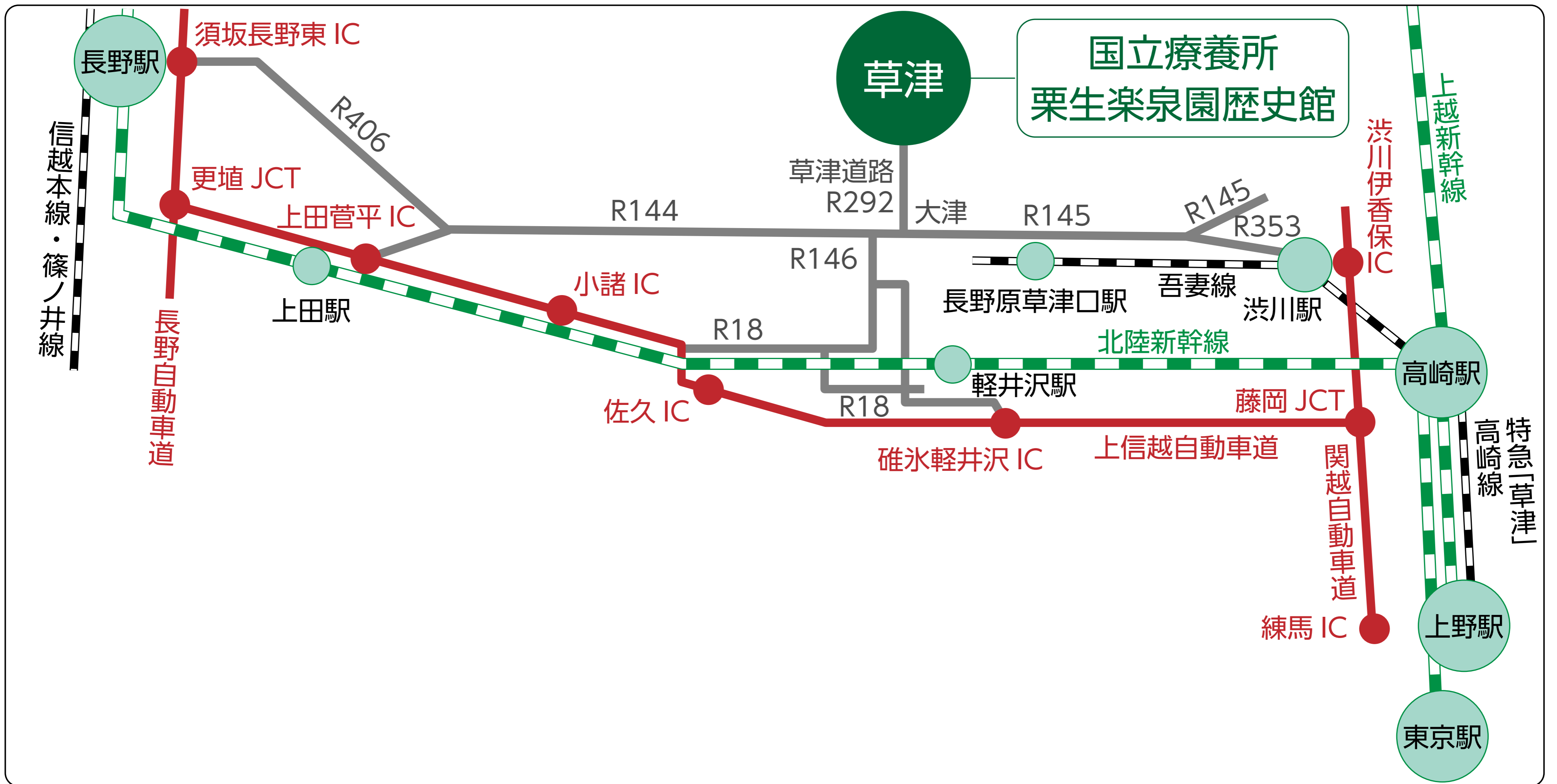
入館料：無料

駐車場：歴史館前にあります

お問い合わせ：TEL0279-88-5999（栗生楽泉園福祉室）

Access

栗生楽泉園 歴史館（群馬県吾妻郡草津町草津乙647）までのアクセス



車で

- 関越自動車道「渋川伊香保IC」より約70分
- 上信越自動車道「上田菅平IC」より約80分
- 草津温泉街から約3km（約5～7分）

電車・バスで

電車

JR 吾妻線「長野原草津口駅」下車

バス

長野原草津口駅より草津温泉行きバス（約25分）→ 草津温泉バスターミナル下車→タクシー（約5分）



監修：国立療養所栗生楽泉園 園長 坂本 浩之助

制作：群馬県健康福祉部感染症・疾病対策課 発行日：2026年3月